

The Birth of the Yen — Meiji Currency Reform

円の誕生と明治の通貨制度

1871年、新貨条例。両・分・朱から円・銭・厘へ。近代日本の通貨基盤はこうして築かれた。

投資と思考の書齋

<https://anni-memo.github.io/investment-library/>

WHAT HAPPENED

新貨条例（1871年） -- 両・分・朱から円・銭・厘へ

1871年（明治4年）、明治政府は「新貨条例」を公布し、日本の通貨制度を根本から改革した。

江戸時代の複雑な三貨制度 -- 金の両・分・朱、銀の匁、銅の文 --
を廃止し、新たに「円・銭・厘」という十進法に基づく統一的な通貨体系を導入した。

- 1円 = 100銭 = 1000厘
- 金本位制を採用（1円 = 金1.5グラム）
- 円形の貨幣を標準とした（「円」の名称の由来）

これは単なる通貨の変更ではない。国家の経済基盤を近代化するための、根本的な制度改革だった。複数の通貨が地域ごとに異なるレートで流通していた状態から、全国統一の通貨制度へ。この変革の大きさは、現代のEUにおけるユーロ導入にも匹敵する。

WHY IT HAPPENED

なぜ十進法を採用したか -- 西洋近代化の文脈

十進法の採用は、明治政府の近代化政策の一環である。

江戸時代の貨幣単位は複雑だった。金貨は1両=4分=16朱という四進法、銀貨は重量による計算、銅銭は独自の単位体系。これら3つの異なる計算体系が並存する状態は、国際貿易を行う上で大きな障壁だった。

当時の先進国 -- イギリスを除く -- は十進法に基づく通貨制度を採用していた。フランスのフラン、アメリカのドルはいずれも100分の1を補助通貨とする十進法である。

- 国際貿易における換算の容易さ
- 国内商取引の効率化
- 近代的な会計制度の導入
- 徴税制度の合理化

通貨の十進法化は、度量衡の統一や太陽暦の採用と並ぶ、明治維新の近代化改革の柱だった。計算が容易になることで、商業・金融・行政のすべてが効率化される。

SHIBUSAWA & BANKING

渋沢栄一と第一国立銀行

新しい通貨制度には、それを流通させる仕組みが必要だった。その中心的な役割を果たしたのが、渋沢栄一（1840-1931）である。

渋沢は1873年、第一国立銀行（現・みずほ銀行の前身の一つ）を設立した。「国立銀行」とは国営銀行ではなく、アメリカのNational Bank制度に倣った民間銀行で、政府の認可を得て紙幣を発行する権限を持っていた。

渋沢が目指したのは、単なる銀行の設立ではない。近代的な株式会社制度と銀行制度を日本に根づかせることだった。

- 株式を公募して資本を集める近代的な企業形態
- 預金を集め、融資を行う銀行の基本機能
- 紙幣の発行を通じた信用創造

渋沢はその後、約500の企業の設立に関わり、「日本資本主義の父」と呼ばれるようになる。2024年からは一万円札の肖像にもなっている。

渋沢栄一の功績は、個別の企業を作ったことではない。「企業を作る仕組み」そのもの -- 株式会社制度と銀行制度 -- を日本に移植し、定着させたことにある。

CRISIS OF CURRENCY

国立銀行条例と紙幣乱発の混乱

1872年の国立銀行条例は、当初、紙幣と金貨の兌換（交換）を義務付けていた。しかし、金の準備が不足し、兌換が困難になった。

1876年、政府は条例を改正し、兌換義務を撤廃した。不換紙幣（金との交換を保証しない紙幣）の発行を認めたのである。

この結果、国立銀行の数は急増した。1879年には153行に達し、各行が競って紙幣を発行した。通貨供給量は急膨張し、激しいインフレーションが発生した。

- 西南戦争（1877年）の戦費調達のための政府紙幣増発
- 153の国立銀行による紙幣の乱発
- 米価は1877年から1880年にかけて約2倍に高騰
- 通貨の信認が大きく揺らいだ

これは近代日本が経験した最初の本格的な通貨危機だった。通貨発行の自由化が、管理なき信用膨張を招くという教訓は、後の中央銀行設立の直接的な契機となる。

MATSUKATA DEFLATION

松方デフレと通貨安定

インフレの収束に乗り出したのが、大蔵卿（後の大蔵大臣）松方正義である。

松方は1881年から厳しい緊縮財政を実行した。政府支出を削減し、増税を行い、不換紙幣を市場から回収して償却した。いわゆる「松方デフレ」である。

松方の政策は通貨の安定をもたらしたが、同時に深刻な副作用を伴った。

- 物価の急激な下落（デフレーション）
- 農村部の疲弊 -- 米価下落で多くの農民が土地を失った
- 農民一揆の多発（秩父事件など）
- 地主と小作人の格差拡大

しかし松方は、この痛みを伴う改革と並行して、1882年に日本銀行を設立した。紙幣発行権を日本銀行に集中させ、通貨管理の一元化を実現した。さらに1897年には金本位制への復帰を果たし、円の国際的な信認を確立した。

インフレを止めるための緊縮は、常に痛みを伴う。松方デフレは、通貨安定と社会的犠牲のトレードオフという、金融政策の根本的なジレンマを明治日本に刻み込んだ。

WHAT CHANGED

何が変わったか

両・分・朱の複雑な通貨体系が十進法の「円」に統一され、国際取引が可能になった。国立銀行による紙幣乱発がインフレを招き、中央銀行（日本銀行）設立への道筋を作った。

LEGACY

今に残っているもの -- 円という通貨の基盤

明治の通貨改革が築いた制度的基盤は、150年以上経った現在もそのまま機能している。

- 「円」という通貨単位は、新貨条例から一度も変わっていない
- 日本銀行は松方の構想から生まれ、現在も唯一の中央銀行である
- 渋沢が導入した株式会社制度は、日本経済の基盤である
- 十進法の通貨体系は世界標準として定着している

明治の改革者たちが直面した問題 -- 通貨の統一、信用の管理、インフレとデフレの制御 -- は、形を変えて現在も続いている。日本銀行の金融政策、政府の財政運営、為替レートの変動。これらすべての起源が、明治の通貨改革にある。

FOR INVESTORS

投資家にとっての意味

明治の通貨改革の歴史から、投資家は以下の教訓を得られる。

- 通貨制度は変わりうる --
 - 「円」は永遠の存在ではない。通貨制度は政治的決定によって根本から変更される可能性がある
- 紙幣乱発はインフレを招く --
 - 管理なき通貨供給の拡大は、必ず通貨の減価をもたらす。この原則は150年前も現在も同じである
- 緊縮はデフレと痛みを伴う --
 - インフレの修正には社会的コストが不可避。金融政策の変更は、常に勝者と敗者を生む
- 制度の安定性は資産価値の前提 --
 - 通貨・法制度・中央銀行が安定していることは、すべての投資の大前提である

現代の日本銀行の金融緩和政策、円安の進行、国債残高の膨張。これらを考えるとき、松方デフレや国立銀行の紙幣乱発の歴史は、単なる過去の出来事ではなく、現在の政策を評価するための参照点となる。

KEY TERMS

関連用語

新貨条例

1871年公布。円・銭・厘の十進法通貨体系を導入した法令。

円・銭・厘

1円=100銭=1000厘。明治以降の日本の通貨単位。

国立銀行条例

1872年制定。民間銀行に紙幣発行権を認めた法令。

不換紙幣

金や銀との交換を保証しない紙幣。1876年の条例改正で発行が認められた。

松方デフレ

松方正義による緊縮財政。不換紙幣を回収しインフレを収束させたが、深刻なデフレを招いた。

渋沢栄一

第一国立銀行を設立し、約500の企業創設に関わった「日本資本主義の父」。

第一国立銀行

1873年設立。日本初の近代的銀行。現・みずほ銀行の前身の一つ。

投資と思考の書齋

<https://anni-memo.github.io/investment-library/>

投資は自己責任です。このサイトの内容は情報提供を目的とし、投資助言ではありません。